

弥生石器の基礎的研究（3）

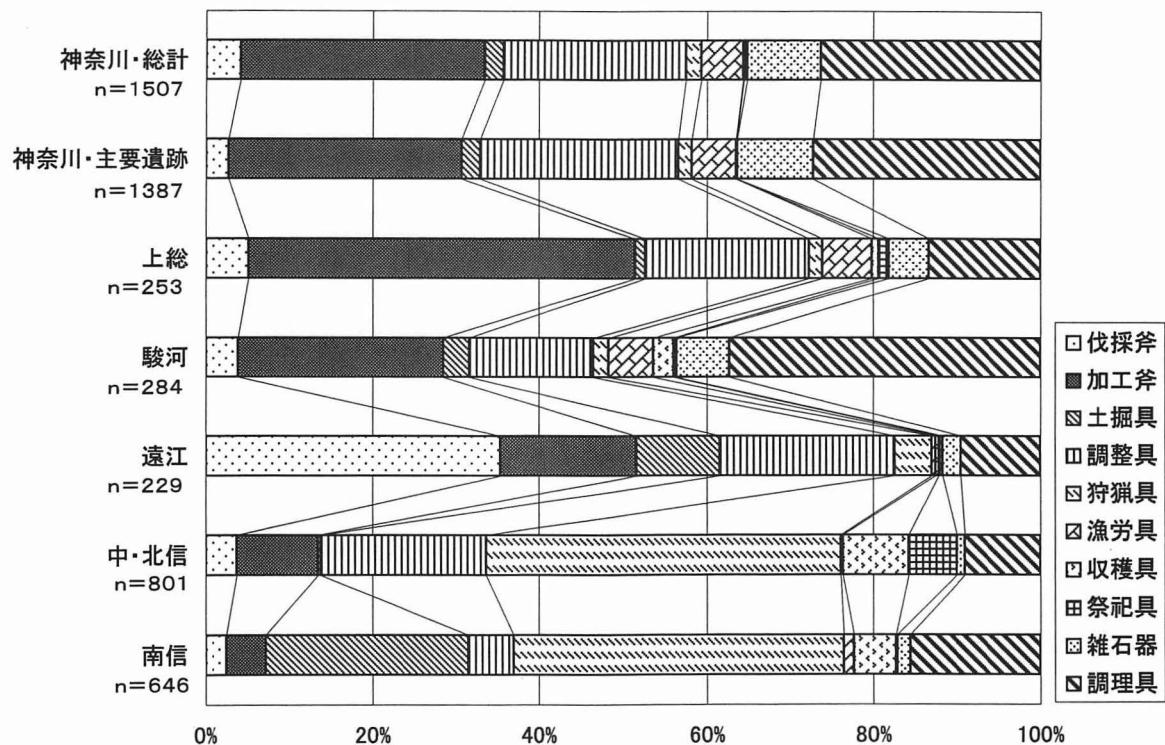
弥生時代研究プロジェクトチーム

1. はじめに

これまで2年間にわたり、県内で出土した弥生時代の石器について集成・分類を行い、基礎的な統計処理による様相の把握を行ってきた。今回も引き続き、弥生石器を対象として検討を行うこととする。

前号では、時期ごとの器種組成、磨製石斧の法量の傾向、地域的な組成の傾向、調理具・調整具の器種組成の傾向等について検討を行ったのであるが、その結果、石器の種類・量ともにIV期（中期後葉・宮ノ台式期）に増大し、V期（後期）に激減するという、関東地方に通有のあり方が再確認された。しかしながらまた一方で、県内の地域的な器種組成の傾向として、V期の「朝光寺原」地域の石器依存度が相対的に高く、なおかつ調理具の占める割合が高いといった点で、隣接する「下末吉」地域と相違が認められることや、漁撈具の分布と割合に有頭石錘の分布が関連するらしいこと等が明らかとなった。またさらに、金属器の普及（=磨製石器類の減少）と調整具（砥石類）の出現頻度が比例関係にはなっていないという状況も明らかにされた。

今回は、神奈川県内の石器組成の特徴をより明確にするために近接地域の代表的地域・遺跡の様相と比較し、その上で県内の代表的遺跡について分析を試みることによって、県内における地域色を明らかにすることを目的とする。



第1図 神奈川県および近接地域の石器組成

分析の方法は今回も統計的処理による組成の比較を中心に行うこととし、石器の器種・量とともに豊富なIV期の遺跡を取り上げて分析することにした。

分析の対象とする遺跡は、石器が11点以上出土している堅穴住居址が2軒以上、または遺跡全体でIV期の石器が50点以上あることを選出の基準としたが、この基準を下回っている場合でも地域を代表する遺跡として選んだ遺跡もある。分析に当たっては、遺跡出土のIV期の石器すべてを対象とした。

県内の遺跡については地域的に代表的な遺跡を選び、また同時に、遺跡の地理的立地条件も考慮した。このため、今回はIV期の遺跡の分析であるが、前号でのV期の地域区分に近い地域区分となっている。分析対象となった遺跡は、「相模」地域の県西部から三ツ俣遺跡（低地）と砂田台遺跡（台地）、三浦半島から赤坂遺跡と佐原泉遺跡、「南武藏」地域の下末吉台地地域から大塚遺跡と折本西原遺跡、多摩丘陵地域から関耕地遺跡と観福寺北遺跡および観福寺裏遺跡の4地域9遺跡である。

近接地域の遺跡についてはIV期の主要遺跡を選び、静岡県の遠江地域から1遺跡、駿河地域から5遺跡、千葉県の上総地域（下総南西部を含む）から4遺跡、長野県の南信地域から2遺跡、中信地域と北信地域から各1遺跡の3県6地域14遺跡を分析対象とした。なお、山梨県には分析対象として良好な遺跡が見当たらなかったため、検討を加えていない。

県内遺跡のデータは前回までに集成したデータを用いた。県外の遺跡については、今回新たにデータ化して分析したが、県内遺跡と同様の資料化は行っていない。

分析に当たってはメンバー全員で検討を重ね、県外遺跡のデータ集成および各遺跡の分析は全員で分担して行った。グラフについては、峰および伊丹が整理統合して出力した。原稿は文末に文責を示し、用語の統一と全体の編集は伊丹が担当した。
(池田)

2. 近接地域の特色

(1) 千葉～上総～

千葉県は石器として相応しい石材が産出せず、出土する石器に関しては製品・未成品を含めた他地域からの流通が想定されている（石川1994）。ここでは上総地域のIV期を代表すると考えられる千葉市城の腰遺跡、市原市大厩遺跡・菊間遺跡、袖ヶ浦市美生遺跡といいすれも台地上に所在する集落遺跡の石器組成を示すことにした（第2図）。

まずこの4遺跡を概観してみると、1. 大厩遺跡・城の腰遺跡に見られるように木製品製作に関わると考えられる伐採斧・加工斧が60%以上を占める集落遺跡、2. 美生遺跡に見られるように伐採斧・加工斧は20%を越えるに過ぎず、約50%を調理具が占める集落遺跡、という大別が可能であろう。菊間遺跡はこの中間的な石器組成を示すものと見なされ、加工斧と調整具、祭祀具と調理具がほぼ同じ比率で出土している事実が指摘できる。

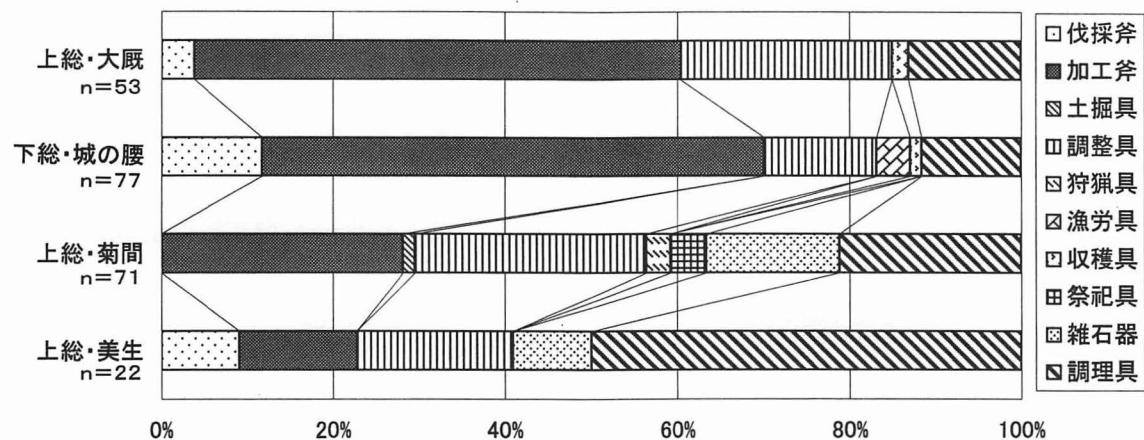
これと同様の傾向は神奈川県においても見られ、大塚遺跡は約50%弱を伐採斧・加工斧が占め、関耕地遺跡での組成は美生遺跡に、砂田台遺跡は菊間遺跡に類似している。また、静岡県の遠江・駿河地域においても角江遺跡・矢崎遺跡においては伐採斧・加工斧が、有東遺跡・雄鹿塚遺跡では調理具が多数を占めるなど、有東式土器・宮ノ台式土器という内容的にも近似した土器型式分布圏で示される両地域においては、集落遺

跡の石器組成に共通する要素が見出せる。この背後に想定されるものとしては、均一的な生産体制の存在があげられようし、石器組成に見られる上記の傾向は各集落が生業に適応した用具を選択した結果であるとも考えられるのである。

ここで他の周辺地域と比較した場合、千葉県の上総地域に見られる特色を指摘するならば、組成に占める伐採斧・加工斧の比率の高さがあげられる。上総地域の4遺跡の総数で見ると、223個体の石器のうち伐採斧13個体、加工斧98個体と約50%をこの二者が占めている。これは遠江・駿河地域が約40%、中・北・南信地方で11%に過ぎないことと対照をしており、また神奈川県の総計での約34%をも越えている。先述のように適した石材の産出が見られない千葉県でのこのあたり方は特異であり、それが加工斧に、そして伐採斧にまず利用された背景には農耕社会としての生業の中で、農耕具を含む木製品生産がいかに重要な意味を持っていたのかを示すものと思われる。また大廐遺跡に見られる調整具の比率の高さは未成品等を他地域から入手し、集落内で再加工を行い、刃部の再生を繰り返し行っていた事情を物語るものと思われるのである。

このIV期、南関東地方には既に各種の鉄器が流入しており、磨製石斧の生産はその不足を補うために行われたという想定は、従来の研究の中で幾度も繰り返されてきている。特に原材となるべき火成岩系の礫が僅少な上総地域におけるあり方に対して、この地域が大規模な環溝集落群を形成している事実から石器だけでなく鉄器の供給が前提であることが指摘されている（安藤1997）。神奈川県から上総に至る集落遺跡において木工用の伐採斧・加工斧が高い比率を占めている事実は、「見えざる鉄器」の見積りの多寡も問題ではあろうが（櫛宜田1997）、利器が鉄器化してゆく過程の一端を示している可能性も考えられるのである。

（高村）



第2図 上総における主要遺跡の石器組成

(2) 静岡～駿河・遠江～

静岡県内で分析の対象としたのは、遠江の浜松市角江遺跡、駿河でも西に位置する藤枝市上藪田川の丁遺跡・清水遺跡・静岡市有東遺跡と東に位置する沼津市雄鹿塚遺跡・清水町矢崎遺跡の5遺跡、計6遺跡である。遠江と駿河全体のそれぞれの割合は第1図のとおりである。静岡県では各遺跡は周辺の石材を用いて石器を製作していた可能性が高いとされ（平野1986）、石材の差異を越えた共通項があれば、それが地域色と

呼び得る地域と言えよう。

遠江は角江遺跡1遺跡のデータであるが、その特徴としては、伐採斧が3割近くを占め、他地域と比べて突出していることがまずあげられる。土掘具が南信について多く、収穫具も比較的多い。反対に、調理具の少なさが中・北信と並んで際だっている。

駿河の特徴としては、調理具が非常に多いことが第一にあげられる。それ以外の器種では、調整具はやや少ないものの、神奈川県や上総などと比較的似かよった割合を示しているようである。しかしながら、地域の特徴が、そのままその地域内の各遺跡でもあてはまるかどうかは問題がある。駿河においては、遺跡ごとにその様相は大きく異なっており、地域ごとの特徴を抽出することは難しい。

各遺跡ごとの石器組成は第3図のとおりである。以下、個別にみていくこととする。

角江遺跡は三方原台地南方の砂堤列上に立地しており、旧河道や方形周溝墓などが検出されている。既に述べたように、伐採斧が3割以上と突出していることが特徴としてあげられる。ただしここでは旧河道などの出土が大半で、この組成の割合がそのまま集落における石器組成の割合とは言い難い。

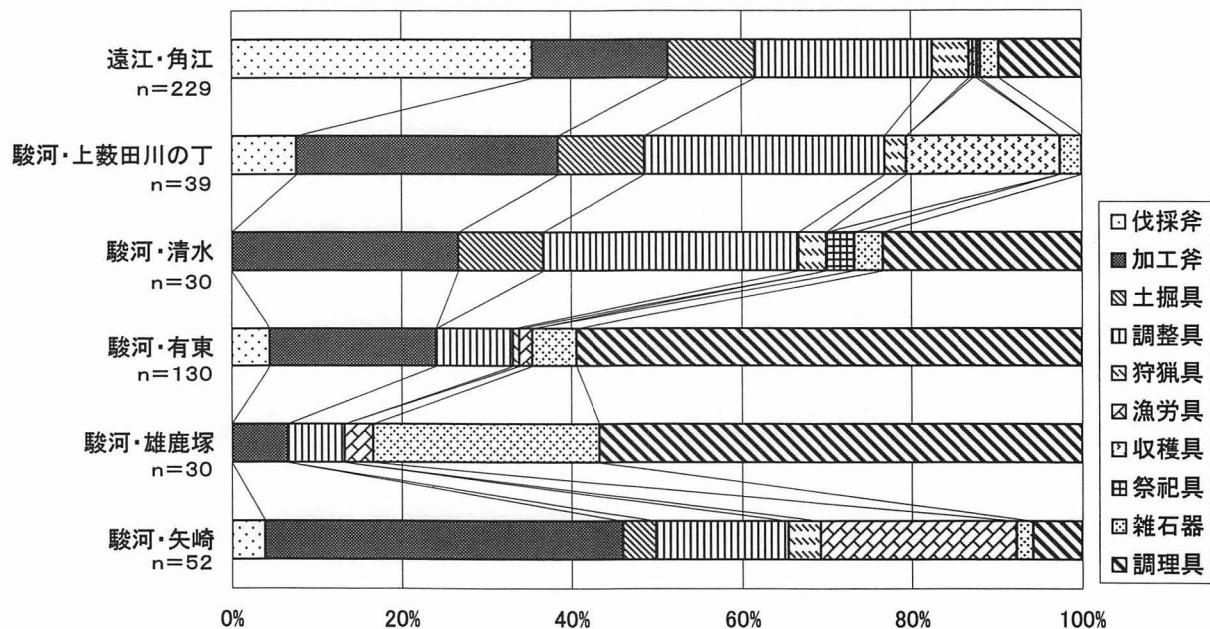
上戸田川の丁遺跡は志太平野の沖積地上に立地している。調査面積は狭いものの、堅穴住居などが検出されている。加工斧と調整具がそれぞれ3割以上と多く、それに約2割の収穫具が続く。

清水遺跡も志太平野の沖積地上に立地している。ここでは3割を調整具が占め、それに加工斧が続き、調理具も2割認められる。ただし、角江遺跡と同様、自然流路からの出土である。

有東遺跡は静岡平野の後背湿地上に立地している。集落と水田域、墓域などが検出されており、部分的な調査ではあるものの静岡平野のなかでも抜きん出た規模をもつと考えられる。ここでは6割近くを調理具が占めている。

雄鹿塚遺跡は標高1m程度の低湿地帯に立地している。トレンチ調査であり、総点数でも30点であるが、過半数を調理具が占めている。

矢崎遺跡は狩野川の形成した河岸段丘上に立地している。ここでは、4割余りが加工斧であり、ついで多



第3図 遠江・駿河における主要遺跡の石器組成

いものが漁撈具である。そしてこの漁撈具の割合は2割以上と突出している。ただし、総数52点の石器は、戦前の調査のものも含んでおり、報告された組成の割合の比率が実体と見合ったものであるか考慮する余地がある。

以上のように各遺跡ごとの差異を承知した上では、全体の傾向を示すことにはためらいを感じる。集落を完掘するような新たな資料の増加によって、今後大きく変わることも予想はされるが、現時点での非常に大局的な傾向として考えてみたい。

IV期の石器組成は、畿内などでは伐採斧が加工斧に比べ量的に卓越するのに対し、宮ノ台式土器文化圏では伐採斧が少ないことも特徴の一つといわれている（安藤1998）。駿河でもほぼ同様の結果が得られており、宮ノ台式土器分布圏と駿河との共通性の高さを裏づける結果となっている。遠江の角江遺跡は、これらの遺跡と明らかに異なって伐採斧が卓越するが、これが活動形態を異にする地域差であるのか、遺跡自体の個性であるのかは明らかではない。

伐採斧・加工斧などの磨製石斧以外の器種では、遺跡ごとで大きなばらつきはあるものの、敲石・磨石など調理具としたものが極端に多い遺跡が駿河でみられることは特徴の一つといえるだろう。

駿河地域の特徴としては、漁撈具が一定程度の割合を占めていることもあげられる。なかでも矢崎遺跡ではかなり多く、距離的に近い神奈川県の三ツ俣遺跡の様相と共に共通するところがある。これは有頭石錐などの分布などからも裏付けられる。

上記のことをふまえてみてみると、駿河は神奈川県との親縁性が強い地域と考えられる。遠江になると大分異なる要素もみられるが、遠江自体は南信や中・北信に比べると相対的には神奈川県の方に共通する部分が多いようにも思われる。しかしながら、遠江と神奈川県との検討は、遠江以西のデータとの比較を踏まえた上で行なうべきであろう。

（飯塚）

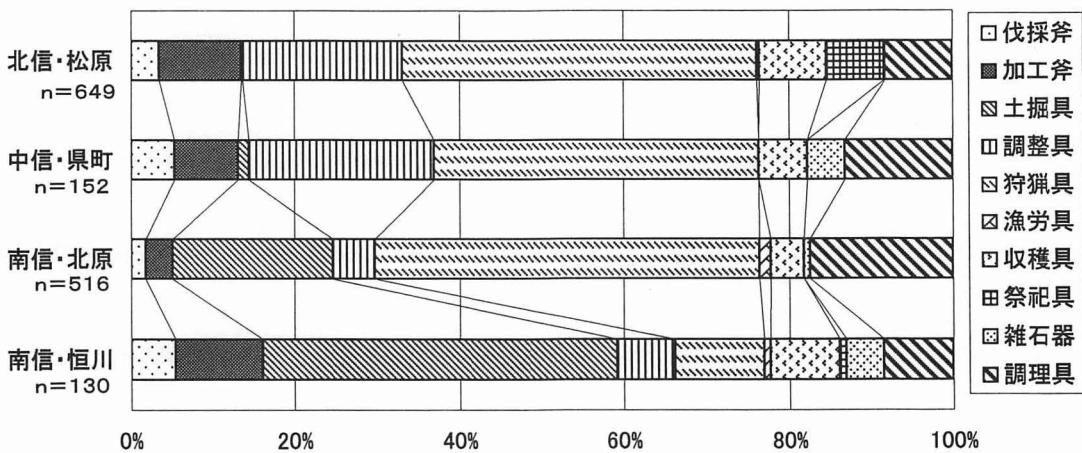
(3) 長野～中・北信、南信～

長野県の趨勢を提示するにあたっては、南信の飯田市恒川遺跡群と北原遺跡、中信の松本市県町遺跡、北信の長野市松原遺跡を主要な例として扱った。グラフはそれらの遺跡から出土した資料をデータ化したものである（第4図）。

選択した遺跡の立地をみると、恒川遺跡群と北原遺跡はともに天竜川右岸の河岸低位段丘上の扇状地に占地し、県町遺跡は松本平の薄川右岸の扇状地先端部、松原遺跡は千曲川右岸の自然堤防から後背湿地上にかけて位置する。

これらのデータで最も特徴的なのは、狩猟具の組成比率が非常に高いことである。主要例のうち、恒川遺跡群だけは1割程度に留まるものの、その他の県町・北原・松原遺跡ではともに4割を超え、量的に突出している。狩猟具には打製・磨製石鏃両方が存在し、それぞれの組成比率は遺跡によって異なる。また近接する恒川遺跡群と北原遺跡の例をみてもわかるように、狩猟具が極端な組成比率を示すのはある地域全体を通じての様相ではなく、遺跡毎に違いを見せていくようである。北信でも松原遺跡では4割強の比率を示すのに対し、同じ長野市内のIV期の遺跡の中には出土した石器の中に打製・磨製石鏃双方で7%程度しか存在しない例もみられるという（久保1993）。

逆に差異の少ない部分に目を向けると、収穫具は数こそ1割弱と少ないがどの遺跡においても同程度の割合で出土しており、県域全体を通じて安定した組成比率を示している。収穫具には打製・磨製石包丁の双方



第4図 信濃における主要遺跡の石器組成

があり、形態や穿孔の数等の属性から数種類の類型が見られる。

また今回のデータでは雑石器の中に含ませた「使用痕を持つ剥片」のうち、石包丁と同様の石材で縁辺に光沢を有するものが一定量みられる。この光沢が珪酸が付着したものとは断定できないが、石包丁と同様の用途も考えられることから収穫具には多様なバリエーションが存在した可能性は否定できない。

他に長野県における弥生石器出土例の特徴的な点は、調整具や雑石器に分類したものの形態上の多様さであり、例えば砥石類の他にも部分的な研磨痕を有する石器などが存在する。こうした形態差が用途の差、換言すれば研磨する対象の違いを示す可能性を論ずるのは早計であるが、注目しておきたい。

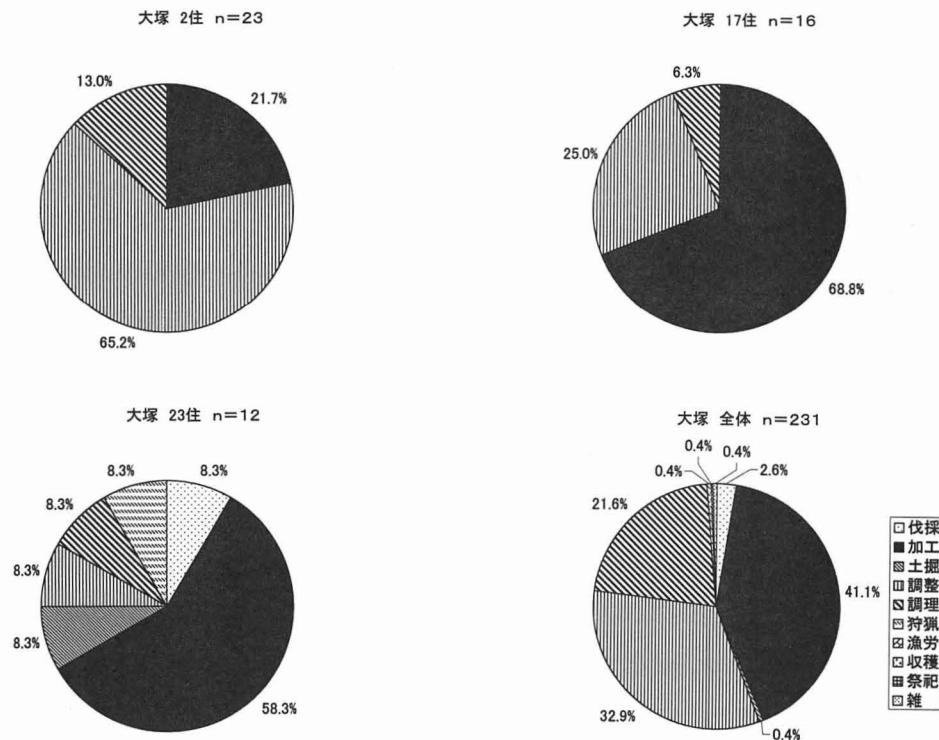
(渡辺)

3. 神奈川の代表的遺跡の特色

(1) 大塚遺跡 横浜市

大塚遺跡では、全体をみると加工斧（41.1%・95点）が最も多くを占め、ついで調整具（32.9%・76点）、調理具（21.6%・50点）で、この3器種が主体を占める（95.6%・221点）。それ以外では伐採斧（2.5%・6点）のほか、土掘具・収穫具・祭祀具・雑石器があるが、それぞれ実数でも1個のみの出土で、主要な組成には含まれない。以上のこととは、加工斧の占有率が突出していることを除けば神奈川県全体の石器組成のあり方とほぼ合致する。

これを11個以上の石器が出土した2・17・23号住居址を例にとり住居址単位でみると、占有率の違いこそあるが、2・17号住居址では遺跡全体のあり方を端的に示すように、加工斧・調整具・調理具の3器種しか出土していない。ただし、2号住居址では調整具が65.2%（14点）、17号住居址では加工斧が68.8%（11点）と、主体となる器種に相違がみられる。また、23号住居址では、主体となる3器種のほか、伐採斧・土掘具・狩猟具などが含まれ、組成にはバラエティーがあり、個々の遺構間では組成のあり方にかなりばらつきがみられることが分かる。

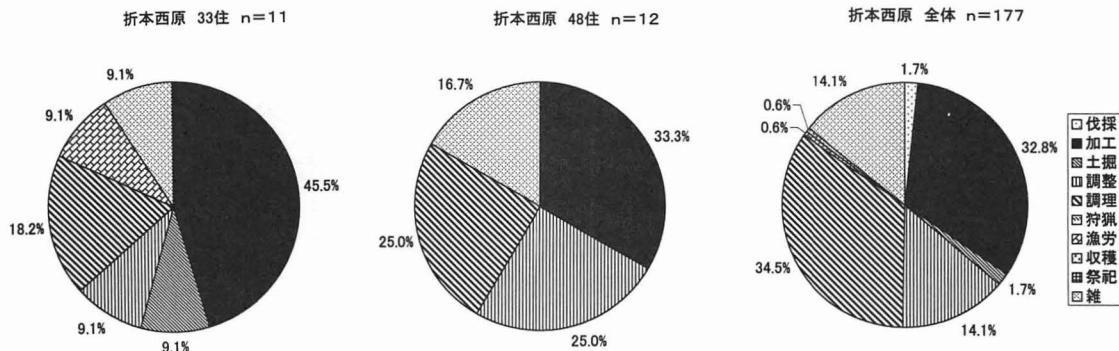


第5図 大塚遺跡の石器組成

(2) 折本西原遺跡 横浜市

折本西原遺跡では、全体で見ると調理具（34.5%・61点）が最も多くを占め、ついで加工斧（32.8%・58点）、調整具・雑石器（各14.1%・25点）で、伐採斧・土掘具・狩猟具・収穫具が数%ずつとなる。特に占有率の高い石器は無いが、加工斧・調理具の多さに対し、調整具が前出の二器種の1/2以下の出土量である点は特筆すべきであろうか。ただし、雑石器を除けば、主体となる3器種について神奈川県全体の石器組成のあり方から逸脱することはない。

住居址単位でみると、48号住居址では加工斧・調整具・調理具・雑石器が遺跡全体の組成を反映するように出土しているが、33号住居址では加工斧が45.5%（5点）を占めるのに対し、調理具18.2%（2点）・調整具・土掘具・漁撈具は10%以下で、大きく加工斧に偏っている。11個以上の石器が出土した住居址が2軒の



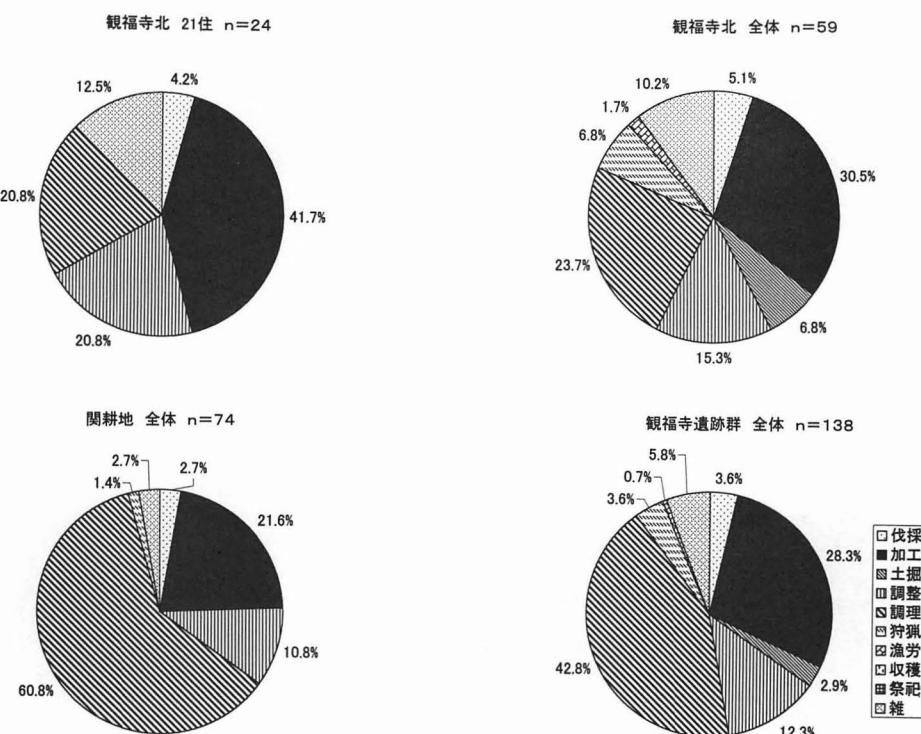
第6図 折本西原遺跡の石器組成

みであるため、ここで住居址単位の石器組成について細かい検討はなし得ないが、加工斧・調理具が組成の中で主要な位置を占めている点は遺跡全体のあり方と合致するものの必ずしも遺跡全体の組成が個々の住居址の組成に反映するわけではない。
 (新開)

(3) 観福寺遺跡群 横浜市

遺跡は横浜市緑区荏田に所在し、早渕川右岸の丘陵上に位置する弥生時代中期後葉の環濠集落であり、方形周溝墓も検出されている。本遺跡群は調査区分に、観福寺裏遺跡、観福寺北遺跡、関耕地遺跡の3冊の調査報告書が刊行されているが、立地およびその内容から同一遺跡と考えられる。ここでは各遺跡名を調査区を表すものととらえ、様相を把握してみたい。各遺跡毎の様相は以下の通りである。

- ・観福寺裏遺跡 5点あり、全て加工斧である。これは検出遺構の少なさに起因するものと考えられる。
- ・観福寺北遺跡 分類基準における収穫具・祭祀具は出土していないが、他の器種はいずれも出土している。内訳は加工斧(30.5%・42点)・調理具(23.7%・33点)・調整具(15.3%・21点)の3器種が主体を占め、加工斧が最も多い。他の器種は僅少である。次に多数の石器を出土した21号住居址を見てみると、遺跡全体の様相と同様に、加工斧(41.7%・10点)・調理具(20.8%・5点)・調整具(20.8%・5点)の3器種が主体を占め、これに雑石器(15.5%・4点)、伐採斧(4.2%・1点)が続く。
- ・関耕地遺跡 分類基準における土掘具・漁撈具・収穫具・祭祀具は出土していない。加工斧・調理具・調整具の3器種が主体をなすことは観福寺北遺跡と変わらないが、この中でも調理具が60.8%(45点)と圧倒的多数を占め、これに加工斧(21.6%・16点)、調整具(10.8%・8点)が続く。この他に伐採斧・狩猟具・雑石器が出土しているが数は僅少である。



第7図 観福寺遺跡群の石器組成

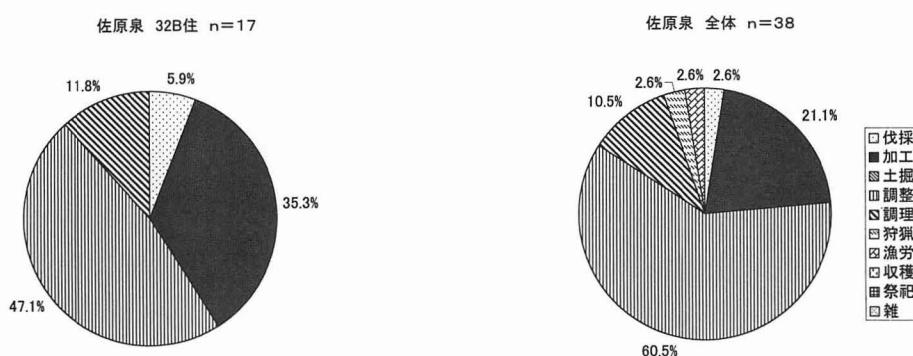
④遺跡群全体 調理具が42.8%（59点）と最も多い。これは関耕地遺跡において多数の調理具が出土していることに起因する。調理具の後には加工斧（28.3%・39点）、調整具（12.3%・17点）が続き、他の伐採斧（3.6%・5点）・土掘具（2.9%・4点）・狩猟具（3.6%・5点）・雑石器（5.8%・8点）は僅少である。

以上をまとめてみると、観福寺裏遺跡を除いた各遺跡あるいは遺構において最も多いたる器種には違いがあるが、加工斧・調整具・調理具の3器種が主体を占めることに違いはなく、伐採斧・土掘具・狩猟具・漁撈具・雑石器は僅少であり、収穫具・祭祀具は出土していない。これは神奈川県内の様相（第1図）とほぼ合致する。関耕地遺跡においては調理具が圧倒的多数を占めており、これは駿河の様相（第3図）と近似し、奇異な印象を受ける。しかしこの要因を安易に論じることはできない。（村上）

（4）佐原泉遺跡 横須賀市

遺跡全体における組成は、伐採斧2.6%（1点）、加工斧21.1%（8点）、調整具60.5%（23点）、狩猟具・漁撈具各2.6%（各1点）、調理具10.5%（4点）である。神奈川県総計の組成と比較した場合、伐採斧（神奈川県総計4.2%）・加工斧（同29.3%）ではやや低く、調整具（同21.6%）が飛び抜けて高い割合を占める。また、調理具（同26.3%）が低く、漁撈具（同5.0%）・雑石器（同8.9%）がやや低率である点も特徴としてあげられよう。また、最も多くの石器が出土した第32B号住居址（総計17点）においても、調整具が多く（47.1%・8点）を占めている。

佐原泉遺跡における石器組成に共通する遺跡として、同じ三浦市に所在する赤坂遺跡がある。両遺跡には共通して、伐採斧・加工斧・狩猟具・漁撈具の割合が低く、調整具の割合が高いという特徴が認められる。このような特徴は、この地域特有の石器組成といえよう。



弥生図 8

第8図 佐原泉遺跡の石器組成

（5）赤坂遺跡 三浦市

遺跡全体における組成は、伐採斧3.4%（4点）、加工斧20.3%（24点）、調整具42.4%（50点）、雑石器2.5%（3点）、調理具31.4%（37点）である。神奈川県総計における組成と比較した場合、伐採斧・加工斧・雑石器ともやや低く、調整具・調理具の割合が高い。

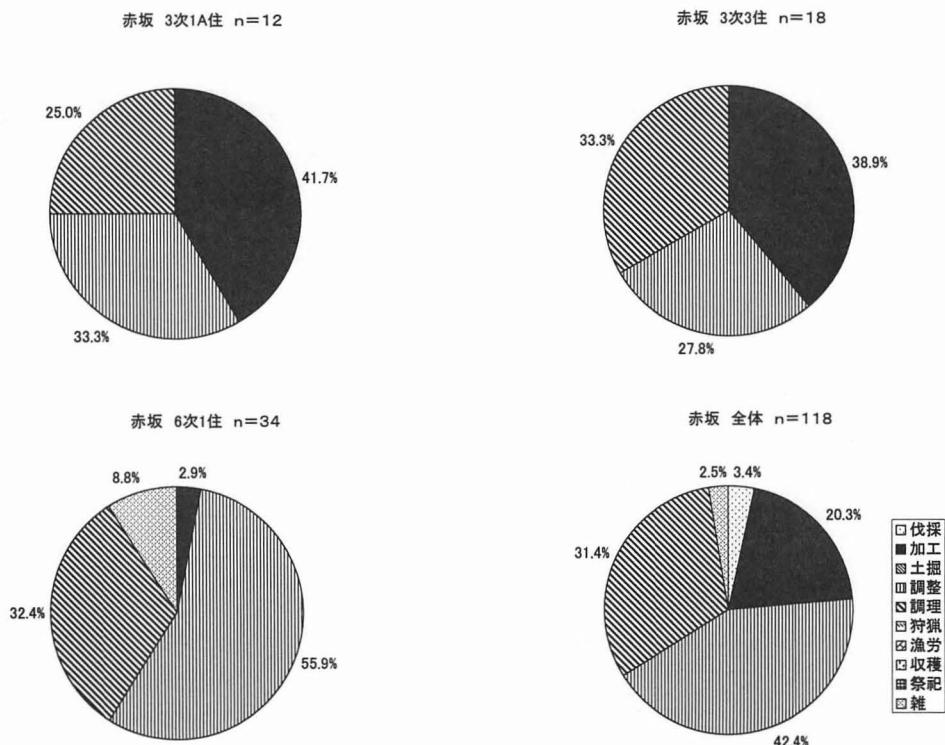
11点を超える石器が出土した住居址（3次1A住・3次3住・6次1住）を見ると、加工斧に大きなばら

つきが認められるが、本遺跡の特徴である調整具はいずれも高率（33.3%・27.8%・61.3%）である。

先に述べたように、佐原泉遺跡と赤坂遺跡には共通点が多い。伐採斧の割合がやや低く、加工斧・狩猟具・漁撈具が少ない。そして、最大の特徴となる調整具の占める割合が高い。このような共通点は、他の神奈川県内主要遺跡で見ることができず、この地域に特有の事象といえる。伐採斧・加工斧等が少なく、道具を加工する道具である調整具の割合が高いということはいかなることを示しているのか、現段階としては不明といわざるを得ない。

さらに組成の類似した周辺の遺跡として、調整具がやや多く、狩猟具・漁撈具・雑石器が少ないという点で大塚遺跡があげられ、加工斧が少ないという点で関耕地遺跡・三ツ俣遺跡があげられる。大塚遺跡・関耕地遺跡とも、佐原泉遺跡・赤坂遺跡に隣接する地域に所在する遺跡であり、何らかの関連性が予想される。

(阿部)

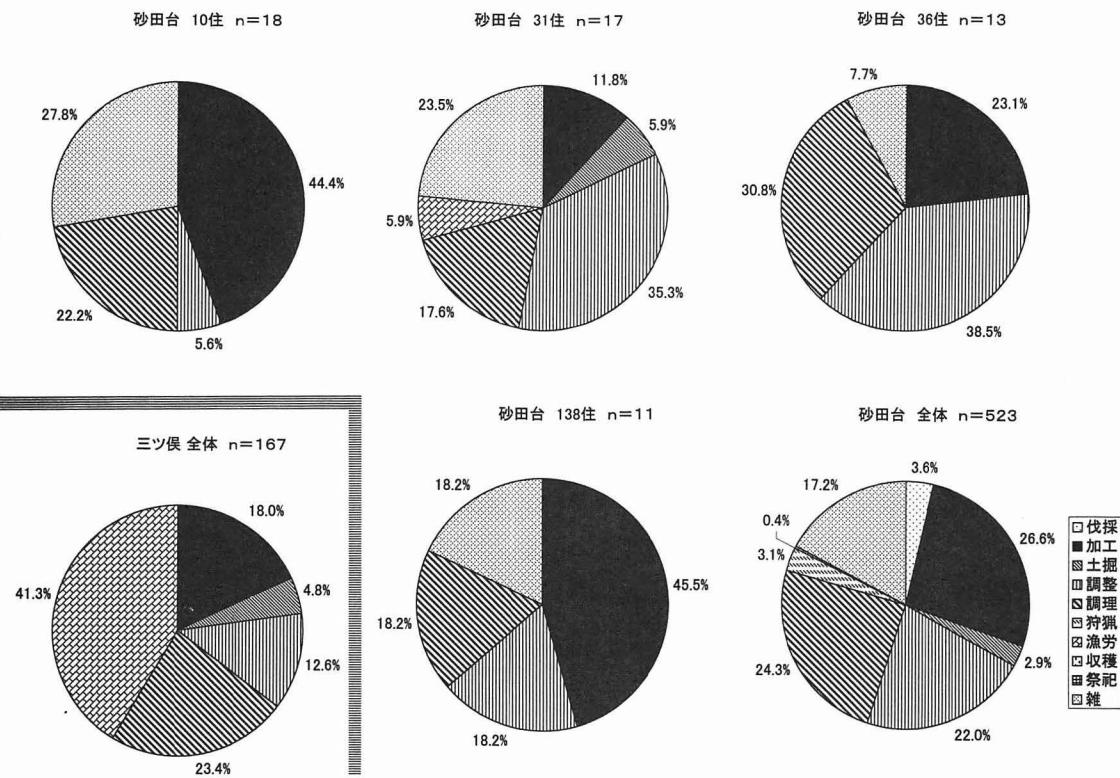


第9図 赤坂遺跡の石器組成

(6) 砂田台遺跡 秦野市

砂田台遺跡は遺跡全体で見ると、加工斧が26.6%（139点）、調整具が22.0%（115点）、調理具が24.3%（127点）を占め、これだけで全体の70%以上を占める。残りは17.2%を雑石器が占め（90点）、伐採具・土掘具・狩猟具が数%ずつである。

これを今回抽出した住居址ごとに見ると、調理具の占める割合は17.6%～30.8%ではほぼ一定の割合を保っている。しかし、加工斧と調整具については占有率にかなりのばらつきが見られる。10号住居址では加工斧が44.4%（8点）を占める一方、調整具は5.6%（1点）である。138号住居址も加工斧が45.5%（5点）を占めていて、残りは調整具・調理具・雑石器が1/3ずつを占める。31号住居址と36号住居址では調整具がそ



第11図 三ツ俣遺跡の石器組成

第10図 砂田台遺跡の石器組成

それぞれ35.3%（5点）・38.5%（6点）を占めている。このように、この二つの器種については、占有率の突出する遺構の存在が見られる。

伐採斧・土掘具・狩猟具それに漁撈具の占有率は極めて低く、出土する遺構も限られており、汎遺跡的に用いられたものととらえることはできない。

以上の点から、個別の遺構については占有率データにはらつきがあるが、遺跡全体では神奈川県の総計にほぼ類似した占有比率であるといえよう。

(7) 三ツ俣遺跡 小田原市

三ツ俣遺跡は11点以上出土する住居址はないため、遺跡全体のデータで検討を行った。加工斧・調整具・調理具がそれぞれ18.0%（30点）・12.6%（21点）・23.4%（39点）出土している。調理具については神奈川県の総計や主要遺跡の平均値とほぼ同率であるが、加工斧・調整具は平均値よりもやや低くなっている。

この遺跡を特徴づけるものは漁撈具の突出（41.3%・69点）で、主体となる石器となっている。それに比べて伐採斧は出土しておらず、土掘具も極めてわずかである。これは神奈川県の総計や、主要遺跡のデータから見ても特異なもので、沿岸地域に存在するという立地面からきた特徴であるととらえられる。

（櫻井）

4. まとめ

今回は前回までの成果を受け、IV期に限定して近接地域をも射程に入れ、その石器組成について考えてみた。第1図からは上総=加工斧突出型、駿河=調理具突出型、遠江=伐採斧突出型、中・北信=狩猟具突出型、南信=狩猟具+土掘具突出型という類型を想定できた。また駿河・上総は漁撈具が一定程度組成する地域とも読める。これに対して神奈川県はバランスがとれているというか特徴があまりないように見受けられる。しかし各地域の状況が、ある意味で見せかけとも言えるのは2節で論じられたとおりである。遺跡毎に強烈な差異が存在している。また3節で述べられたように、神奈川県もそれと同様にかなり特徴的な遺跡も見受けられ、さらに住居址単位で見てみると組成比にかなりのばらつきが看取される。これはどの地域にもあてはまる現象である。ここで取上げた遺跡で石器製作が行なわれた遺跡は多くはない。ほとんどが消費の結果廃棄した資料が中心になる。石器は土器とは異なり、住居址によって占有の度合いが大きく異なることと併せて考えれば、特定の住居の機能・性格を石器組成から類推することが可能となろう。ここから先は応用的研究の領域となり、その解釈は共同作業にはなじまず、踏込むことはここでは避ける。

分析を重ねてきて問題点をあげれば分類基準についてである。調理具としたものなかにはハンマーストーンなどの調整具が混入している恐れがある。先学諸氏との解釈の差異はここに根差していると言えよう。器種と石材との関連も極めて重要な課題であるが、保管資料が偏っており、全点の実見が困難なことにより諦めた。また使用痕にまで考究できず用途・機能の推定まで手が届かなかったのは遺憾である。

今後の課題としては前号のまとめで谷口が列記したことに加え上記のことも含め多々ある。今年度のはじめに弥生石器の基礎的研究3箇年目のまとめとしてどのようなテーマに取り組もうとしたか列挙しておく。

1. 器種毎の再分類と編年 分類階層は現状でよいのか再考し、中分類・細分類・法量 にもとづく大中小の分類を行ない、細分ののち、さらに細やかな石器の変遷を追う。
2. 器種組成の問題 遺跡の性格と器種組成の関係について把握するために遺跡ごとの組成を調査する。
3. 機能・用途論 機能類推を行なう。石庖丁の代替器種は何かとか、扁平片刃石斧の用途は何だったのか等。
4. 文献研究 弥生石器研究史を著述する。また研究史を踏まえた今後の展望はどうなのか。
5. 補遺に徹する 補遺を含めた神奈川における弥生石器分類表を提示する。

5を除きいずれも大きな課題であるが、我々は1年という短い期間で共同作業になじむものとして「2. 器種組成の問題」を選択し、その上で範囲を近接諸地域にまで広げてみたということである。

神奈川県における弥生石器の大きな趨勢はなんとか把握できたのではないかと自負するものである。これにて石器についての集成・分析作業は一旦終結する。次年度はまた別の視点から神奈川県の弥生文化に論攷を加えていきたい。

(伊丹)

補 記

長野県松原遺跡については長野市埋蔵文化財センターによる既報告資料に拠った。遺跡の中心部を調査した長野県埋蔵文化財センターによる最終報告書が近刊であり、膨大な伐採斧をはじめ多種多様な石器が出土していることを担当者の青木一男・町田勝則両氏から教示された。この成果が反映されれば北信の評価も変更の余地があることをお断りしておきたい。

文 獻

データ元遺跡文献

<県 外>

城の腰遺跡

菊池真太郎・谷 旬・矢戸三男 1979 『千葉市城の腰遺跡』千葉東金道路建設工事に伴う埋蔵文化財調査報告3 (千葉市大宮地区) 日本道路公団東京第一建設局 千葉県文化財センター

大厩遺跡

三森俊彦・阪田正一 1974 『市原市大厩遺跡』千葉県開発公社 千葉県都市公社

菊間遺跡

斎木 勝・種田斉吾・菊池真太郎 1974 『市原市菊間遺跡』千葉県都市部 千葉県都市公社

美生遺跡

實川 理・浜崎雅仁 1992 『美生遺跡群I 第1地点』君津都市文化財センター発掘調査報告書第71集

角江遺跡

佐野五十三・中川律子・青木 修・中嶋郁夫 1996 『角江遺跡II』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告書第69集
静岡県埋蔵文化財調査研究所

上藪田川の丁遺跡

鈴木隆夫・池田将男 1981 『上藪田モミダ遺跡 上藪田川の丁遺跡 鳥内遺跡』国道1号藤枝バイパス(藤枝地区)埋蔵文化財発掘調査報告書第6冊 建設省中部地方建設局 静岡県教育委員会 藤枝市教育委員会

清水遺跡

鈴木隆夫・椿原靖弘 1992 『清水遺跡』藤枝市教育委員会

有東遺跡

菊田 宗・天石夏実 1997 『有東遺跡 第14次調査報告書』静岡市埋蔵文化財調査報告43 静岡市教育委員会

矢崎遺跡

中野國雄・秋本真澄 1998 「矢崎遺跡」『清水町史 資料編II(考古)』清水町史編さん委員会

雄鹿塚遺跡

鈴木裕篤 1989 『雄鹿塚遺跡発掘調査報告書』沼津市文化財調査報告書第46集 沼津市教育委員会

恒川遺跡

小林正春・桜井弘人・佐々木嘉和・山下誠一 1986 『恒川遺跡群 遺物編』飯田市教育委員会

北原遺跡

神村 透 1972 『北原遺跡』高森町教育委員会

県町遺跡

直井雅尚・関沢 聰 1990 『松本市県町遺跡』松本市文化財調査報告No.82 松本市教育委員会

松原遺跡

飯島哲也・寺島孝典・中殿章子 1991 『松原遺跡』長野市の埋蔵文化財第40集 長野市埋蔵文化財センター

矢口忠良 1993 『松原遺跡II』長野市の埋蔵文化財第51集 長野市埋蔵文化財センター

飯島哲也・寺島孝典・中殿章子 1993 『松原遺跡III』長野市の埋蔵文化財第58集 長野市埋蔵文化財センター

<県 内>

大塚遺跡

岡本 勇・小宮恒雄・坂上克弘・武井則道 1994 『大塚遺跡II』港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告XV 横浜市埋蔵文化財センター

折本西原遺跡

石井 寛 1980 『折本西原遺跡』横浜市埋蔵文化財調査委員会

岡田威夫・水澤裕子・御堂島正・松本 完 1988 『折本西原遺跡 I』折本西原遺跡調査団

觀福寺裏遺跡

北原實徳・斎藤啓子 1986 『神奈川県横浜市觀福寺裏遺跡』日本窯業史研究所報告第18冊

觀福寺北遺跡

平子順一・鹿島保宏 1989 『觀福寺北遺跡・新羽貝塚発掘調査報告』横浜市埋蔵文化財調査委員会

閑耕地遺跡

田村良照 1997 『横浜市觀福寺北遺跡群 閑耕地遺跡発掘調査報告書』閑耕地遺跡発掘調査団

佐原泉遺跡

中村 勉 1989 『佐原泉遺跡』泉遺跡調査団

赤坂遺跡

岡本 勇・川上久夫 1977 『三浦市赤坂遺跡』赤坂遺跡調査団

中村 勉・諸橋千鶴子 1992 『赤坂遺跡 第3次調査地点の報告』赤坂遺跡調査団

中村 勉・諸橋千鶴子 1994 『赤坂遺跡 第2次・第4次・第5次・第6次・第7次調査地点の報告』三浦市埋蔵文化財調査報告書第3集

砂田台遺跡

宍戸信悟・上本進二 1989 『砂田台遺跡 I』神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告20

宍戸信悟・谷口 肇 1991 『砂田台遺跡 II』神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告20

三ツ俣遺跡

市川正史・伊丹 徹 1986 『三ツ俣遺跡(第1分冊)』神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告13

近藤英夫・立花 実 1991 『国府津三ツ俣遺跡』国府津三ツ俣遺跡調査団

参考引用文献

安藤広道 1997 「南関東地方石器～鉄器移行期に関する一考察」『横浜市歴史博物館紀要』第2号

安藤広道 1998 「南関東地方における石製利器の終焉をめぐって」『考古学ジャーナル』No.433

石川日出志 1994 「東日本の大陸系磨製石斧—木工具と穂摘み具—」『考古学研究』第41巻第2号

久保勝正 1993 「松原遺跡の石器群の様相」『松原遺跡Ⅲ』長野市の埋蔵文化財第58集 長野市埋蔵文化財センター

瀬宜田佳男 1997 「石から鉄へ—鉄器化の評価をめぐって—」『東日本における鉄器文化の需要と展開』

第4回鉄器文化研究集会発表要旨集

平野吾郎 1986 「東海地方における弥生時代の石器について」『研究紀要』I 静岡県埋蔵文化財調査研究所

弥生時代研究プロジェクトチーム1997・98 「弥生石器の基礎的研究」(1)・(2)『研究紀要 かながわの考古学』3・4

神奈川県立埋蔵文化財センター・財団法人かながわ考古学財団